シンポジウムB

身体とイマージュをめぐって：「土方巽と美術」

（司会）國吉和子

このシンポジウムでは，暗黒舞踏の創始者，土方巽と美術の関わりを探ることによって，イマージュの生成の磁場としての身体について考えることを目的とした。土方が主に絵画を中心として美術との出会いを意識するようになった時期は，1950年代後半から1960年代初頭と推測される。当時，舞踊，文学，絵画，演劇の違いを超えた新しい芸術を志向していた津田信敏（舞踊家，近代舞踊派主催）に接近したことや，ネオ・ダダの美術家と接触し一時期共演したことが，土方の美術に対する見方を育み，一層明確なものにしたといえるだろう。

「助けてもらった絵――田中岑」の小文で土方は，昭和25年頃から３年間ほど，外食券と引き換えに手にいれた田中岑による貼り絵のことを記している。土方と美術の関わりはこの一枚の絵から始まった。そして1960年代日本の前衛美術運動ネオ・ダダのメンバーをはじめシュールレアリストなど新しい美術作家との共演では，肉体を物体として硬質な素材に対決させるような明確なフォルムが求められた。さらに1970年代に東北歌舞伎と称される一連の作品には，記憶の貯蔵庫としての肉体が微細な技術の完成によって出現した。こうした約30年間に渡る活動を通して，土方は美術家と刺激的な創作の現場を常に共有しているのである。

土方の没後は，美術家の証言が唯一の手掛かりであったが，1998年に実現した「土方巽全集」全２巻の刊行（河出書房新社，東京）と，慶応義塾大学アートセンターに土方巽アーカイブの開設は，多くの未公開資料が公開される機会となった。その中に，土方直筆による舞踏ノートが一部，含まれていた。このノートは一般に「舞踏譜」と呼ばれ，土方の舞踏の創作法を探るための重要な資料となった。

これらのノートは土方が作品を創作中，弟子を振り付ける際に使われたものと推測されるが，その指示の多くが絵画の図像を引用して行なわれていたことは興味深い。引用された絵画作家は，ベーコン，ターナー，ビアズリー，デルボー，デュビュッフェ，デ・クーニング，モロー，ルドン，クリムト等等，他に日本の浮世絵など東洋の古典画も含め，40作家以上におよんでいる。こうした作家の作品を印刷物から切り取ってスクラップに貼り付け，鉛筆で夥しい書き込みを入れながら，土方は動きを模索したことが伺える。換言すれば，土方は，絵画のなかのイマージュの源泉ともいえる領域に踏み込み，そこから舞踏作品を取出してきたいえるのである。

今回のシンポジウムにご参加頂いた，アメリカ，シカゴ大学博士課程在学(2000年12月現在)のウィリマム・マロッティ氏は，日本の近・現代精神史がご専門で，特に1960年代日本の前衛芸術運動の調査研究に以前来日された。「舞踏の問題性と本質主義の罠」（「シアターアーツ」1997年）では，日本における舞踏の評価に対して，鋭い批判を行い注目された。今回はネオ・ダダの美術運動と土方についてお話をお願いした。

ヨシダ・ヨシエ氏（詩人，美術評論家）は，戦後の前衛美術に深く立会ってこられた中で，土方とも長く親交があった方である。戦後美術と瀧口修造というご自身の研究テーマから，土方の美術との関わりをお話し頂いた。著書に「異端の画家たち」「戦後前衛所縁荒事十八番」「解体劇の幕おりて――60年代前衛美術史」など。

宇野邦一氏（立教大学教授）はフランス文学思想がご専門で，ドゥルーズ，アルトーの研究者として多くの著書を著している。晩年の土方と出会い，御自身の研究の上でも大きな影響を受けたという。現在は，文学，美術，舞踏などさまざまな主題を横断しながら，意味や表象が解体する批評の可能性にむけて刺激的な執筆活動を続けておられる。主な著書に「意味の果てへの旅」「「風のアポカリプス」「アルトー　思考と身体」「他者論序説」など。

＜付記＞なお，今回，海外からパネリストとしてお招きしたマロッティ氏には，講演草稿の掲載をお許し頂いた。ご講演の中で使用された美術作品のスライドに関しては，諸般の事情で添付が叶わなかったことをここに付記させて頂く。